

体の感覚を意識する学習活動の試み

—帰国児童教育学級における実践—

お茶の水女子大学附属小学校

栗原知子

- I. 研究の経緯
 1. 「からだ」部のとらえ方から
 2. 海外での生育歴が、体の感覚に及ぼす影響への関心
- II. 実践研究の概要
 1. 研究目的
 2. 研究の方法
 - (1) 期間
 - (2) 対象
 - (3) 授業の概要
 - (4) 授業の記録
- III. 実践内容及び考察
 1. 学習活動の実際（児童の様子）
 - (1) 体の部位の言葉を書いてみる
 - (2) 自分の体の人型を作り、体の部位の言葉を貼ってみる
 - (3) 体の言葉が入ったことわざや慣用句を調べ、気付いたことを話し合う
 - (4) 体に意識を向ける運動を実際に行う
 2. 学習活動の分析と考察
 - (1) 言葉による体の感覚
 - (2) 体に意識を向ける動きを通して
- IV. まとめ
 1. 成果
 - (1) 海外経験による体の感覚の違い
 - (2) 体の言葉と実際の動きを組み合わせる学習の効果
 2. 今後に向けて
 - (1) 帰国児童に必要な体験とは何か
 - (2) 楽しく取り組める「体に意識を向ける活動」にむけて
- V. 参考・引用文献

I. 研究の経緯

1. 「からだ」部のとらえ方から

本校では、いわゆる体育を「からだ」という名称で、より自分の体の感覚に目を向ける学習活動をめざして、実践を継続している。実際、今回の学習指導要領の改訂に際しても、その基本方針として「心と体をより一体としてとらえ、健全な成長を促すことが重要であることから、引き続き保健と体育を関連させて指導することとする」と述べられている。これは、自分の体に意識を向ける重要性について触れたものと捉えられる。その意図と問題意識をより明確に表し、取り組もうという思いをこの学習分野名に込めているのである。

ただ現在、学習指導要領において、このような活動は「体づくり運動」の中「体ほぐしの運動では、心と体の変化に気付いたり、体の調子を整えたり、みんなでかかわり合ったりするための手軽な運動や律動的な運動をすること」(第3学年及び第4学年)と表されているにすぎず、変化に気付くための体の感覚にどう触れさせるかについては、課題を抱えていると感じていた。

2. 海外での生育歴が、体の感覚に及ぼす影響への関心

平成24年度、帰国児童教育学級(4年4組)を担当した。期間の差こそあれ、小学校時代の半分以上を海外で過ごしてきた児童である。学習内容はもちろん、経験においても日本で育ってきた児童とは幾分かの差がある。このような児童に接し、海外と日本では、自分の体に対する意識や体のとらえ方に、何らかの違いがあるのではないかと考えた。これまで、日本の児童が自分の体にどのような意識を向けているか、自画像(全身)に知っている体の部位の言葉を書き入れていくという活動によって探る研究にも取り組んできた。その発展として、海外経験の有無による違いについて関心を持ったことが、もう一つの研究のきっかけである。

II. 実践研究の概要

1. 研究目的

研究の経緯で述べた関心に基づき、本研究の目的を以下のように考えた。

- (1) 帰国児童における体の感覚の実態を実践から考察する。
 - (2) 体ほぐしの学習について、児童が関わりあいながら楽しく親しめ、また体の感覚にも目を向けられるような授業作りをめざして実践し、省察する。
- ここでは、あくまでも実践ありきで、実践の分析をもとに考察していきたい。

2. 研究の方法

- (1) 期間 2013年(平成25年)2月 1単位時間40分 計9回
- (2) 対象 お茶の水女子大学附属小学校 平成24年度 4年4組(帰国児童教育学級)児童

実践を行った3学期時点の在籍は6名(男子2名 女子4名)である。それぞれ本校への入学時期、海外の滞在地、使用言語などは異なっている。以下に詳細を記す。

4月入学	①男児	アメリカ(NY)	現地校(英語)
	②女児	上海	現地校国際学級(学校では中国語)
9月入学	③男児	ベルギー	インターナショナルスクール(学校では英語)
	④女児	香港	カナダ系インターナショナルスクール(学校では英語)
	⑤女児	アメリカ(ハワイ)	現地校(英語)
1月入学	⑥女児	イギリス	現地校(英語)

(3) 授業の概要

- 1) 対象授業 「からだ」の時間（5時間）、創造活動の時間（4時間）
- 2) 学習内容 「からだ探検」（「体づくり運動」より）

3) 学習の概要

からだの時間、および創造活動の時間などを通して、体の感覚を意識する活動を組んだ。

まず、自分の身体と向き合う活動を行い、次に海外生活の環境の違いを生かして、言葉による感覚の比較なども行った。また、平行して実際に体を動かす活動にも取り組んでいった。以下に概要を記す。

- ① 初めに自分の全身の絵を描く。その絵に体の部位で知っている言葉をどんどん書きこんでいく。

まず、それぞれが海外で使っていた言葉で書きこんでみる。（英語5名、中国語1名）

次に日本語でも書きこんでいく。（1.5時間）

- ② 自分の体の人型をお互いに取り合う。見合って誰の人型か考えてみる。

また、自分たちが見つけた体の部位の言葉を付箋紙に書き、人型に貼っていく。気づきを話し合う。（1.5時間）

- ③ 体の言葉が入ったことわざや慣用句を調べてみる。日本語と外国語で言い回しの違いなどを比較してみる。発見を付箋紙に書き出し、人型に貼ってお互いに気づいたことを話し合う。（1時間）

- ④ 関わり合い、体に意識を向ける運動を実際に行う。（5時間）

（目隠し鏡、リラックス、ふれあいゲーム、表現運動など）

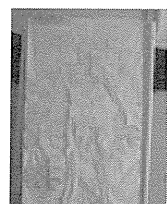
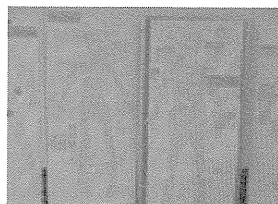
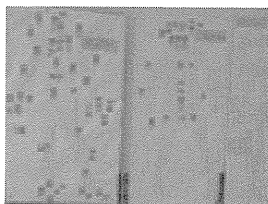
(4) 授業の記録

- 1) VTRによる撮影

ビデオカメラを用いて授業を撮影した。また、活動の様子を写真でも撮影している。

- 2) 人型の作成

児童が自分たちで作成した人型に、活動で調べたことをポストイットで貼り付け、いつでも見られるようにした。また、気づいたことがあったときには、はり足すことができるようにしておいた。



- 3) 学習の記録

児童が学習を振り返るために簡単なカードを作成した。自由記述方式とし、授業後に児童が記入する時間を別にとった。また、継続して行っている絵便りへの記録や前述の付箋紙も活用した。

Ⅲ. 実践内容及び考察

1. 学習活動の実際

- (1) 体の部位の言葉を書いてみる

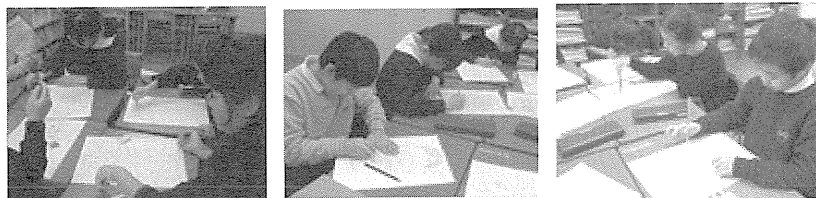
自分の全身のイメージ図をそれぞれが書き、体の部位の言葉を知っている限り書いていく活動である。それぞれが書いた図を以下に載せる。海外で使っていた言葉と日本語で書き入れた。

〈児童の様子〉

初め自分の全身を描くことにやや抵抗のある児童もいたが、次第に集中し、楽しんで描いている様子

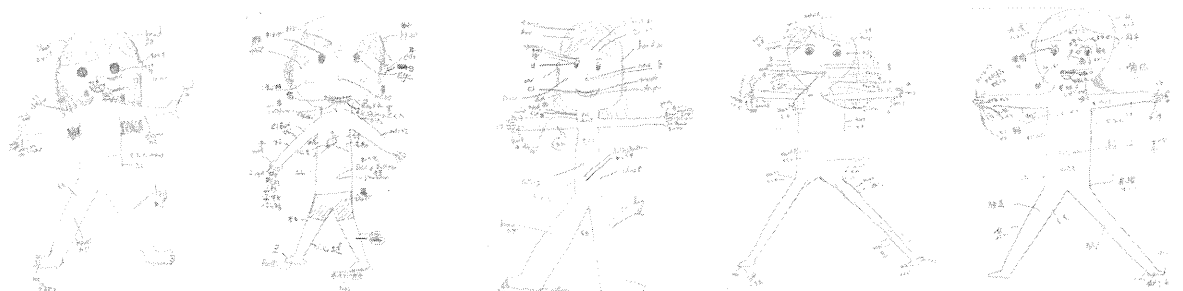
体の感覚を意識する学習活動の試み

が窺えた。体の部位の言葉も、お互いに話をしていくことで少しずつ数が増え、自分の予想よりたくさん言葉が見つかったことに驚いていた子もいた。



自分の全身の図を描き、体の部位の言葉を書いていく。

〈児童が描いた全身の図〉



(2) 自分の体の人型を作り、体の部位の言葉を貼ってみる

お互いに体の輪郭をなぞり、人型づくりをした。これは、低学年「なかま」(創造活動)で「大きくなる子」として長年行っている活動であり、自分の体の大きさを客観視するとともに、お互いに相手の体にじっくり向き合う機会ともなっている。帰国児童は4年生からの編入のため、初めて取り組む活動となる。

〈児童の様子〉

まず、一人をモデルにやり方を説明。切り抜いてできあがった人型を見て歓声が上がります。それぞれがポーズに変化を付けたり、鉛筆の動かし方を工夫したりしながら、お互いに輪郭を書き合っていく。比較的短時間で、全員の人型ができあがった。

児童はできあがった人型を見て、自分自身のイメージと違っていることに驚いたり、体型やポーズで誰だか見分けられることを発見したりしていた。パーティションに貼った人型を、飽きずに眺める様子も見られていた。



次に、自分たちが見つけた体の部位の言葉を付箋紙で色分けし、人型に貼っていくことで、全体を見られるようにした。色分けは児童が使用した言語から、日本語・英語(英語・米語)・普通語(中国語)・広東語の4種類となった。



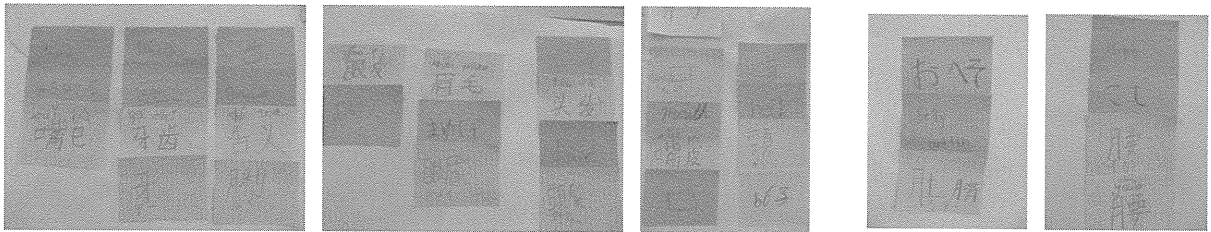
以下が児童が書いた体の部位の一覧である。ここでは、児童が全身の図に書いた中から、大きな人型に書き写した言葉だけを抜き出している。辞書等による記述ではないため正確さを欠く部分や、日本では使われない字もあるが、児童がとらえている言葉という意図のもとそのまま掲載していることを申し添える。なお、記入のない部分には、児童からの記述は見られなかった。

〈体の部位の言葉〉

	日本語	英米語	普通語	広東語
頭	頭	head	头	頭
	髪	hair	头发	頭髮
	おでこ			
	顔	face	脸	
	目	eyes	眼睛	眼
	まつげ	eyelash	睫毛	
	まゆげ		眉毛	眼眉
	まぶた		眼皮	
	鼻	nose	鼻子	鼻哥
	耳	ear	耳朵	耳仔
部	耳たぶ	earlobe		
	口	mouth	嘴皮	口
	くちびる	lips	嘴巴	
	歯	tooth	牙齿	牙
	舌	tongue	舌头	脷
	首	neck	bó子	頸
	あご	chin		
	のど		嗓子	

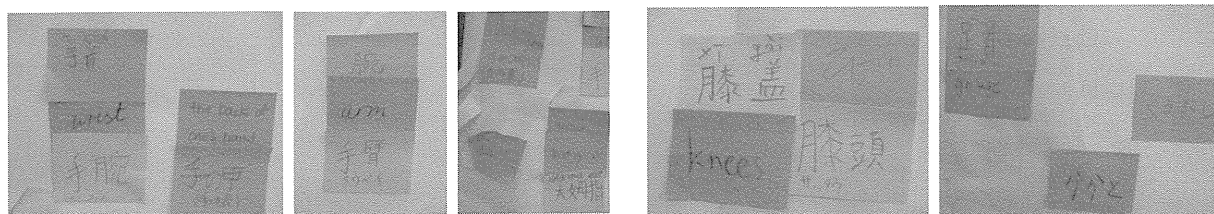
	日本語	英米語	普通語	広東語
体	からだ	body	身体	
	胸	chest	胸	
	わき	armpit		
	わきばら			
幹	お腹	stomach	肚子	
	おへそ	belly button		肚脐
	肩胛骨			
	背中			
	腰	hips	腰	腰

	日本語	英米語	普通語	広東語
その他	はだ			皮膚
	心臓		心臟	
	筋肉		筋肉	
	頭蓋骨			
	背骨			
	骨		骨头	
	尾てい骨		屁股	
爪	nail		手指甲	



	日本語	英米語	普通語	広東語
上肢	肩	shoulder		
	腕	arm		手臂
	手	hand	手	手
	ひじ	elbow		
	手首	wrist		手腕
	手の甲(表)	the back of one's hand		
	掌(手の裏)	palm		
	指		指	手指
	親指	thumb	大姆指	
	中指	middle finger	中指	
下肢	くすり指			
	小指	pinky	小指	

	日本語	英米語	普通語	広東語
下肢	もも	thigh		大脾
	脚	leg	脚	
	ひざ	knees	膝盖	膝頭
	すね			小退
	足			脚Y
	足首	ankle		
	かかと			
	くるぶし			
	足の甲	instep		脚(背)
	足の裏			脚底
	つま先	toes		
	足の指			脚指
	足の爪			脚指甲



(3) 体の言葉が入ったことわざや慣用句を調べ、気付いたことを話し合う

続いて、児童は体の言葉がどのようなことわざになっているか興味を持ったので、調べてみることにした。日本語だけでなく、英米語のイディオムや中国語のことわざも調べていった。

以下が児童が調べてきた体の言葉を使ったことわざや慣用句、イディオムである。

〈日本語〉

頭 部	頭	・頭をひねる	
	顔	・顔が売れる・顔が広い・仏の顔も三度	
	まゆ	・まゆにつばをつける	
	目	・目が肥える・目がなない・目くじらを立てる・目をこらす	
	耳	・耳をふさぐ・耳をかたむける・耳にたこができる・耳がいたい・壁に耳あり、しょうじに目あり	
	ほほ	・ほっぺたが落ちる	
	鼻	・鼻を折る・鼻にかける・鼻で笑う	
	口	・口がすっぱい・口が堅い・人の口に戸は立てられぬ・口が減らない	
	歯	・歯をくいしばる・歯がたたない	
	舌	・舌を巻く	
	あご	・あごで使う	
のど	・のどから手が出る		
首	・首が長くなる		
体 幹	胸	・胸が躍る	
	腹	・腹黒い・腹を割る・腹八分に医者いらず	
	へそ	・へそで茶をわかす・臍をかむ	
上 肢	肩	・肩で風を切る・肩を並べる・肩を持つ・肩を落とす	
	腕	・腕によりをかける・腕が鳴る・腕を上げる	
	手	・手がつけられない・手につかない・手の裏？を返す・手も足も出ない	
		・手をこまねく・手を焼く・手がかかる	
		・手を抜く・手を広げる・手に汗を握る	
		・猫の手も借りたい・手を切る・手を結ぶ	
指	・指をくわえる・後ろ指を指される		
下 肢	足	・足下から鳥がたつ・足が地に着かない・二の足を踏む	
		・足が出る・足を引っ張る・足が速い・足が棒になる	
		・足を伸ばす・足元を見る・揚げ足をとる	
		・すねをかじる	
他	心	・心をくだく	
	血	・血が凍る	

〈英語－日本語〉〈中国語－日本語〉では、同じ意味でも使われている体の部位が異なっているものが見つかった。ここではそれに アンダーライン を引いておく。

>

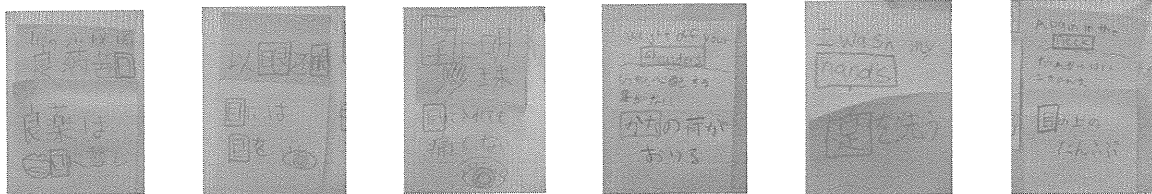
〈英語－日本語〉

頭 部	Lose your <u>head</u> 何かに対してとても怒ること 腹が立つ
	Duck one's <u>head</u> 首を縮める
	It's written all over your face 顔に真実が書いてある
	Egg on your face 何か間違っていることをして、恥ずかしくなること 顔から火が出る
	Your lips say one thing, but your eyes say another 目は口ほどに物を言う
	An experienced eye 目が肥える
	An eye opener 今まで気づいていないことに気づく 目を開かせる
	Music to your ears 今一番自分が聞きたいことを聞く
	Turn one's nose up at ~ 鼻であしらう
	Slip of the <u>tongue</u> 口が滑る
A pain in the <u>neck</u> だれかにイライラさせられる 目の上のたんこぶ	
体幹	Yellow-bellied 勇ましくなくて、自身が持てない人のこと 逆：腹を決める、腹を据える
上 肢	Weight off your shoulders もう何も心配することがない 肩の荷が下りる
	One's arm folded 手をこまねく
	Have your <u>hands</u> full とても忙しい 目が回る
下 肢	I wash my <u>hands</u> 足を洗う
	Drag your feet 本当はやりたくない事もしょうがなくやる
	Robbed of a foot 足を奪われる
他	Break a leg がんばってね！
	Break your heart 胸がつぶれる
	Have a <u>heart-to-heart</u> talk ひざを交える

〈中国語－日本語〉

頭 部	顾头不顾尾藏头不顾腕 頭隠して尻隠さず
	笑逐颜开眉开眼笑 眉を開く うれしいこと
	火烧眉毛 足下に火がつく
	以眼还眼 目には目を
	良药苦口 良薬は口に苦し
上 肢	哑口无言 反論できずに口をつぐむ
	以牙还牙 歯には歯を
上 肢	掌上明珠 目に入れても痛くない
	思将仇报被家犬咬了手 飼い犬に手をかまれる

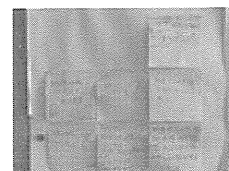
調べた慣用句やことわざを付箋紙に書き、体の部位の言葉と合わせて児童と一緒に人型に貼っていった。日本語、英語、中国語を比べながら貼ることで、同じ意味の慣用句でも使われている部位が、日本語と外国語で違うものがあることが見えてきて、児童の気づきにもつながっていった。一方、同じような言い方をするものもあり、身体感覚の共通点と違いについて確認することができた。ここではアンダーラインで違いを表したが、実際の付箋紙では、体の部位の言葉を囲み、日本語と同じ部位を使っているかどうかで色分けをして、比べやすくした。



以下、児童の気づきを原文のまま記す。

〈児童の気づき〉(児童の記述)

- ・手と顔のところがたくさんあります。
- ・顔の部分にことわざが多い。
- ・胸が一つしかない。顔の方が多い。
- ・上の方が一番多くて、次が真ん中で、いちばん少ないところが一番下っていうのが分かりました。
- ・手と足がたくさんあるのが感動的でした。思ったよりたくさんの慣用句がある。
- ・体の形が見えないぐらいある。こんなにあるとは思わなかった。ちょっといたそうなことわざが多いような。(児童の書いた「体の形」とは、はじめに作った人型のこと)
- ・英語より日本語の方がだいぶ多い。



日本語には、体に関することわざ、慣用句が比較的多いと言われるが、児童が知っていたり調べたりした範囲でも、その傾向が見られ、児童も記述している。また、頭部に関してのものが多という発見もある。普段、あまり意識することがないことを確認できたと言えよう。

〈「腑に落ちる」のはどこ?〉

この活動に付随し、日本語の「腑に落ちる」という言葉に着目した児童がいた。意味としては「納得する、理解する」と知っていた子が多かったが、実際に体のどの辺に落ちる感覚と感じているのか、手で示してみた。

すると6名の内、4名は腹部、1名は腰の周辺、もう1名は初め頭、次に胸の辺りと感じると答え、言葉から受ける感覚の違いも発見することになった。

お腹の辺り



お腹 頭?



やっぱり胸



僕は腰の辺り 僕はお腹だと思う

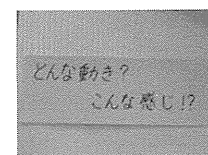


(4) 体に意識を向ける運動を実際に行う。「どんな動き?こんな感じ?」

(目隠し鏡, リラックス, ふれあいゲーム, 表現運動など)

〈子取り鬼〉 一人が鬼, 後の人が縦一列につながり(前の人の肩や腰につかまる), 鬼に一番後ろの人(赤ちゃん)をタッチされないように守るゲーム。

- ・先生を動かすのがすごい簡単でした。
- ・先生の指が脇腹に入って、すごくすぐったかった。先生は意識していなかったと言っています。
- ・みんなのつかみ方が違うことが分かります。
- ・赤ちゃんを守るのがとても楽しかったです。



・肩を触っただけでくすぐったかったです。

〈Blind Mirror (目隠し鏡)〉 ① 2人組で、相手の動きを鏡のように真似して動く。

② 2人で手を合わせ、目をつぶって相手を感じながら自由に動く。

- ・ミラーは目を開けていると色々な動きができる。目を閉じているとなんか変な感じがする。一緒にやった人の心の気持ちが伝わった感じ。
- ・ミラーのは人の感じが伝わってきて花畑みたいでした。
- ・ブラインドミラーをして、二人で同じ事を考えていて、とてもおもしろかったと思いました。
- ・相手が自分とちがう動きをしていることが感じました。
- ・自分が相手と一緒に動きをしていることは感じませんでした。
- ・目隠しミラーで勝利を感じました。
- ・相手と合わせるのに僕がボクシングで負けるのが変だと思いました。ボクシングをやってるのさえ分かりませんでした。

〈Relax Time〉 2人組で一人が横たわり、ペアが体を少しずつゆらしてあげ、リラックスを促す。

- ・横になって気持ちよかったです。
- ・相手がリラックスするのに大変でした。けど僕が相手の後に寝っ転がるとリラックスできていました。
- ・thighだけゆれました。
- ・最後のリラックスタイムで、thighに相手の足をおいたとき、くすぐったかったです。

〈2人でなわとび〉 2人で一本の短縄を用い、一緒に跳べるよう工夫する。

- ・2人で一つの縄跳びを使うことは、タイミングを合わせないとうまくできないことが分かりました。
- ・縄跳びは2人技、難しかったです。タイミングバラバラ！
- ・2人で力を合わせて一つの縄を跳ぶのがとても「難しい」と思いました。
- ・縄跳びはすごく体力を使ってしまいました。疲れしました。

〈命の証拠を探そう〉 一人が横になり、周りから観察して気づきを話し合う。

◎目で見ての気づき

- ・足がピクピクちょっと動いていた。
- ・おなかで呼吸をしていました。
- ・目の中が赤かったです。
- ・目が少し動いていたです。

◎手でふれての気づき

- ・くすぐったら分かりました。
- ・口より鼻から息が出た。
- ・ほっぺがいつでも柔らかい。

〈表現運動「しんぶんし」〉 新聞紙をよく見て動きを真似したり、新聞紙になりきって動く。

・すごく楽しかったです。相手がおもしろいように動かしていて、一緒にやるのも難しかったです。

・新聞の気持ちになれて、新聞のイメージが変わりました。とてもおもしろい表現の仕方だったと思いました。

・新聞がクシャクシャになったりとんだりしていた時の心が分かりました。例えばクシャクシャ→悲しい気持ち

・クシャクシャにした新聞の気持ちが改めて分かりました。新聞はクシャクシャにすると表現が難しく、新聞の気持ちがよく分かりました。

・新聞になって、新聞のかわいそうな気持ちがわかりました。新聞丸めた時、私もぐるぐるになったのがおもしろかったです。

・新聞になりきって踊りました。英語ではその事を「emotion dance」と言います。私は新聞の気持ちが



ちょっと分かった気がします。とても感動しました。みんなのを見た時、新聞一つでこんなにいっぱいできるとは想っていませんでした。

2. 学習活動の分析と考察

(1) 言葉による体の感覚

① 体の部位の言葉

1) 児童が見つけた部位の言葉の傾向

・日本語で比べると頭部が18、体幹が9、上肢12、下肢13、その他8と頭部の言葉が多い。英語では頭部14、体幹6、上肢10、下肢6、その他1である。中国語（普通語）では、頭部15、体幹4、上肢5、下肢2、その他4。広東語では頭部10、体幹2、上肢4、下肢8、その他2である。岩川ら（2000）は、「身体部位語の平均支持数は（中略）どの年齢群においても頭頸部に多く体幹に少な」く、また「どの年齢群においても体幹・四肢に比べ頭頸部の特に顔面部に多」と報告している。

この傾向は、海外経験のある児童にも同様に表れており、日本語だけでなく、外国語（英語、中国語）においても同様の傾向が見られた。

2) 日本語と外国語の違い

・英語圏から帰国している児童の割合が多いが、体の部位の言葉としては、思い出すときに日本語の方が出てきやすいように見えた。日本語では割とよく使われるが、英語などでは子どもたちにとって使う頻度が低いように捉えられた。日本語では知っていても、外国語で何というかわからない部位や言い表しにくい部位があったようである。

・特徴的なのは英語での「腰」のとらえ方である。英語では子どもたちは「hips」としてとらえている。あまり重要な部位とはとらえていないようであった。辞書によると「hip」で「腰、腰回り、腰の左右に張り出した部分の片方（hipsで両側）」とある。ちなみに「waist」は「腰のくびれ」、また「middle」という言い方もあり、これは人体の腰部、胴という解説である。さらに、外国人との会話で出てくる「back」は「neck ~ buttocks」として「腰掛けるといすにふれる部分、hipに対し、尻の肉の方全部をさす」となっている。

・日本語では掌を「手の裏」、手の甲を「手の表」とするが、英語では手の甲を「the back of one's hand」と正反対の言い方をしている。

・中国語と日本語には、あまり大きなとらえ方の違いは見いだせなかった。

② 体の言葉が入ったことわざや慣用句

・児童は日本語の慣用句の多さに驚いており、体の部位がいろいろなたとえに使われているという気付きもあった。

・中国語の慣用句には、日本語のものに通じるものもあり、意味が似ていると捉えられた。

・英語の慣用句は、直接的な使い方が多いという発見があった。日本語との違いで分かりやすかったのは、「I wash my hands」で、日本語では「足を洗う」に当たるという。また、「Lose your head」で「腹が立つ」、「A pain in the neck」が「目の上のたんこぶ」に当たり、体の部位の使い方の違いも見られた。

・「腑に落ちる」など日本の独特の言い回しには感覚的にピンとこない児童もいたが、多くの日本の慣用句には違和感はないようだった。

(2) 体に意識を向ける動きを通して

児童の感想からは、それぞれの動きに対して、体の感覚として感じられたことが読み取れる。例えば、目を開けたときの動きと目をつぶっての動きの違いを手だけを通して感じたこと。「ミラーは目を開けているといろんな動きができる。目を閉じているとなんか変な感じがする」「相手が自分とちがう動きをしていることが感じました」

そこから、相手の動きだけでなく、心まで感じられるように意識が向くこと「一緒にやった人の心の気持ちが伝わった感じ」「ブラインドミラーをして、二人で同じ事を考えていて、とてもおもしろかったと思いました」などは、普段なかなか気づきにくいことであると考えられる。

また、相手との関わり「相手がリラックスするのに大変でした。けど僕が相手の後に寝っ転がるとリラックスできていました」や自分と物との関わり「新聞の気持ちになれて、新聞のイメージが変わりました。とてもおもしろい表現の仕方だったと思いました」にまで、感覚を広げられていることも確かめられた。「おなかで呼吸をしていました」と体を観察する機会ともなっていたと捉えられる。

IV. ま と め

1. 成果

(1) 海外経験による体の感覚の違い

ここでは、海外生活の経験、つまり言語や文化的背景が体の感覚にも影響を及ぼしているのではないかという問題意識を持って実践を行った。

その結果、前述したような言語的感覚の差が多少見られたが、児童はどちらも自然に受け止め、特に違和感を感じるものではないと捉えられた。

帰国児童にとっては、英語や中国語との比較ができるという意味で、改めて日本語の体の言葉や体の部位を使った慣用句を考えるきっかけにもなり、日本語の理解もさらに深まったと思われる。

- ・日本語には体の慣用句が非常に多い。
- ・英語のidiomには直接的な言い回しが多く、体の部位を使わない言い方もある。腹が立つ→Go mad
- ・中国語には日本語に近い感覚の慣用句がある。

このような言葉による気付きから、日本人は体について繊細な感覚を持っていると感じたことも今回の実践から得られた成果の一つと考えている。

(2) 体の言葉と実際の動きを組み合わせる学習の効果

体を言語的に表す活動と平行し、実際に自分の体に意識を向ける動きを行った。ゲーム的な活動を通して、自然に楽しい雰囲気の中で体を触れあったり、お互いの体を意識することができたと考えている。実際に体を動かすことで、言葉の表す感覚を実感した児童もおり、体を通した学習活動の必要性も再確認することになった。これは、帰国児童にだけ特別に行なうのではなく、全ての児童に必要な学習であると考えられる。「からだ」の時間だけでなく、今回のように生活全般を通して意識付けしていくことが、望ましいと捉えている。

今回の実践は、本校の公開研究会でも授業公開を行い、全体的には肯定的なご意見をいただいた。成果の一つとして、他校の先生方からのコメントをあげておきたい。

「本当に仲良く和気藹々と自分や友達の体に触れ、その柔らかさしなやかさ硬さなどを感じ合う姿が見られました」「それぞれ違った学習環境で育ったのに、一つの目的に向かって自分の今までの学び環境を出し合って、認め合って笑顔の中で進めているのがとても印象的でした」「子どもたちが住んでいた国での言い方、姿勢をそれぞれがやってみたり、友達からのアドバイスで進められたりすることがすごく印象的でした」

2. 今後に向けて

(1) 帰国児童に必要な体験とは何か

今回、言語と体の動きの両面から体の感覚を意識する学習に迫った。ここでは、どの言語とも体の感覚にはつながりが感じられた。慣用句など部位の使い方に言語による差はあったが、感覚として違和感を感じるほどではないことが分かった。

ただ、帰国児童の海外経験は多様化する傾向にあり、運動体験も（非体験も）変わっていくだろう事が予想される。そのような変化の中、体に意識を向ける体験も含め、体を通したどのような体験が必要

なのか、実践に基づいて考えていく必要があるだろう。また、それは一般学級に生かせる内容でもあるのかということも含めて、小学生の発達段階に応じた、体を意識する有効な活動を考えていきたい。

(2) 楽しく取り組める「体に意識を向ける活動」にむけて

体づくり運動に取り組むとき、確かに手軽な運動を通すことは大事だと思うが、運動だけで流れてしまい、自分の体に意識を向けることは難しいように感じていた。実際には、分野担任では難しいところもある。生活丸ごと、いろいろな場面で働きかけをすることが必要と感じられるからである。

体の感覚には個人差が大きく、同じ学習をしても感じる場所は個々で違うと思われるが、今回の実践で得られた手応えを元に、一般学級の児童についても、実践し比較していく必要を感じている。

ただ、帰国児童学級の特殊性（人数が少なく、男女の意識もあまりない）の下の実践であることも考慮し、人数や人間関係へも対応した実践を具体化していくことが課題である。

また、今回は帰国児童学級の担任として、時間を柔軟に使い児童に必要と思われる活動を「からだ」の時間以外にも行うことができた。「からだ」の時間だけで、充実した活動にしていくための工夫にも取り組んでいきたい。

このようなからだを意識する活動は行う機会が少なく、本校の「からだ」の時間でより特化して扱う意義は大きい。児童にあった方法を継続して探していきたい。

V. 参考・引用文献

- 1) 岩川眞紀, 栗原知子, 森下はるみ (2000) 「身体部位語よりみた青年女子と児童の身体像の特性」比較舞踊学研究 6 巻 1 号 pp13-24
- 2) 久保健編著 (2001) 『『からだ』を生きる』創文企画
- 3) 久保健・高橋和子・原田奈名子 (2002) 「からだほぐしを楽しもう①～③」汐文社
- 4) 高橋和子編著 (1995) 「表現～風の卵がころがったとき」不味堂
- 5) 高橋和子編著 (2004) 『『からだ』気づき学びの人間学』晃洋書房
- 6) 伴義孝 (2005) 『『気づき』の構造』関西大学出版部
- 7) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 体育編 東洋館出版社
- 8) ジーニアス英和辞典第 4 版 (2012) 大修館書店